

4 友達とおしゃべりをする

1. 「私のクラスのインターアクション」の例

どんな場面？ In what situation?		誰と？ With whom?
例 1)	どんな場面？	留学生の顔見知りの学生（例：チューターなど）と遊びに出かける。
	誰と？	留学生自身が知っている学部生／大学院生
例 2)	どんな場面？	留学生自身の知り合い、または教師がアレンジした学生と連絡を取り、駅で待ち合わせて、おしゃべりしながら登校する。
	誰と？	同じ大学の学部生／大学院生
例 3)	どんな場面？	千羽鶴を折る、クリスマスの飾りを作るなどの作業を一緒にする。
	誰と？	学協力者募集のチラシを見て立ち寄ってくれた学部生／大学院生、教職員など
例 4)	どんな場面？	メールやビデオレターなどで知り合った学外の学生と Skype や Face Time などの通信ツールを使っておしゃべりをする。
	誰と？	日本国内あるいは時差が少ない国の学生たち

なに
何をする？
What to do?

共通の話題を探し出して、おしゃべりをする。

2. デザインのポイント／注意点

- この活動の目的の1つは、話題を見つけておしゃべりを続けたり、必要に応じておしゃべりを切り上げたりする体験を重ねることで、日本語でのおしゃべりに慣れることです。インタビュー活動のように、あらかじめ決められた質問のやり取りに終始しないように活動をデザインしてください。
- 「どんな場面？」では、友達との間でおしゃべりが自然に発生するような場面を考えます。例えば、上の例1の「一緒に遊びに出かける」、例2の「一緒に登校する」場面などです。例2の場合には、学校まで歩く途中で見聞きするさまざまなものがおしゃべりを始めるきっかけとして使うことができます。おしゃべり自体は人を集める目的として設定しにくい場面です。例3のようにおしゃべりができる場所や空間を教師が設定し、その状況で学習者がおしゃべりを始められる場面を作るとよいでしょう。例3に挙げた作業以外にも、トランプやカルタなど誰でも簡単にできるゲームをするという設定も、おしゃべりが自然に始まる場面になります。
- 学内で自然発生的におしゃべりができそうな相手が見つけれない場合には、例4のように学外の学生

と Skype や Face Time などのビデオ通話ツールを使っておしゃべりをする状況をつくります。ただし、Skype での対面が初対面とならないよう、あらかじめメールやビデオレターを送るなどして学生同士の関係をつくっておくようにしてください。

- 「どんな場面？」で避けたいのは、クラスにビジター（日本語母語話者や学部の日本人学生など）を呼び、初対面の相手と対面で時間を区切って話をする機会を設定することです。自然発生的なおしゃべりの場面から遠くなってしまいますし、そのような場合には言語的に優位なビジターのほうが会話の主導権を取ってしまいがちです。授業時間を使っておしゃべりの場面を設定する場合には、課題達成のための話し合いを必要としない、「千羽鶴を折る」や「パズルを完成させる」などの単純な共同作業を1つ用意してください。一緒に作業をしながら自然発生的におしゃべりが始まります。
- 「誰と？」は、お互いにおしゃべりを楽しめる相手として同年代の人にします。本人が知っている友達とおしゃべりが一番自然ですが、そのような相手がいない留学生の場合には教師が設定せざるを得ません。
- 人数は必ずしも1人对1人でなくても構いません。ただし、日本人1人に対する留学生の割合が多い場合には、日本語ができるクラスメートばかりがおしゃべりを楽しみ、日本語ができない留学生はインターアクションに参加しないこともあります。
- この課のインターアクションは、教室の外で行うことが自然です。そのため、留学生自身に自分のインターアクションを振り返らせるためにはICレコーダーや携帯の録音機能で録音させてください。その際は、おしゃべりの相手に、音声を録音することをあらかじめ断っておく必要があります。
- 「自然発生的なおしゃべり場面」でのインターアクションを目指しますが、インターアクションをしたあとに必ず振り返りを行います。そのため、おしゃべりの相手に、授業の課題であることを事前に伝えておく必要があります。学生本人に、おしゃべりの前に教科書を見せるなどして説明させるようにしましょう。後日、知ることになるとせっかくできた友達との関係がギクシャクしてしまいますので、教師のほうで活動計画を立てる際にどのようにしておしゃべり相手に伝えるかを考えてください。

3. 活動の流れの例

教科書（p. 70）のインターアクションの例をクラス活動として行う場合の一例をご紹介します。この課の活動は教室外で行うため、そのための直前の準備として教室内で行うことを紹介します。

(1) 事前準備

- この課に入るときから、「友達を誘って昼ご飯を食べる活動をする時期」を学習者に知らせておきます。
 - * 学食での昼ご飯に限らず、「知り合いの日本人学生と待ち合わせて食事やお茶を飲む」設定にすることもできますが、その際、学習者に経済的、時間的な負担がかからないような配慮が必要です。
- 活動に必用なものとして、おしゃべりを録音できる機材を教師が学習者の人数分用意するか、各学生に持って来させます。
 - * ICレコーダーを貸し出すか、学生自身の携帯の録音機能を使います。

(2) 教室での活動事前準備

p. 80 の「さあ、ほんばん！」のページを各自に記入させてください。

録音機材の録音操作方法を確認するため、クラスメート同士で疑似のおしゃべりをしてみます。

時間配分	授業の進め方		備考
10分	ウォーミングアップ	◆どこで、どんなことのおしゃべりをしたか、クラスメート同士でペアかグループになり、報告し合う。	
15分	録音したものを聞きなおす	◆各自で録音してきたものを聞きなおす。 ◆おしゃべりのときにわからなかった単語について辞書で調べる。	レコーダー、イヤフォン
40分	Part2のPoint 1～5 (pp. 70-78) についての振り返りと補足説明	◆ポイントの流れに沿って、自分の活動で実際にどこが難しかったかなどをクラスで報告し合う。必要に応じて教師が必要な表現などを補足で紹介する。 ・ Point 1：話しかける ・ Point 2：あいづちを使う ・ Point 3：おしゃべりを続ける ・ Point 4：話題を変える ・ Point 5：おしゃべりを終える	
10分	「ふりかえり」(p. 81)の記入	◆「自分」の部分の評価を記入する。 ◆記入し終わったら、評価の理由をクラスメートに説明する。	
20分	相互評価	◆クラスメートが録音したおしゃべりをお互いに聞きあいながら、「ふりかえり」のところのクラスメートの評価部分の点数を記入していく。	
5分	まとめ		

(3) 活動の「ふりかえり」の流れ (90分の場合)

- この授業は学習者自身が自分の活動を振り返るための時間です。テストのフィードバックのように文法の補足説明をしたりせずに、学習者自身の発言を促してください。
- 人数が多い場合にはグループに分かれて話しあわせ、その後にクラス全体でシェアをします。
- 自分以外のクラスメートがどのくらいインターアクションができるのかを意識することも「相互評価」の目的になりますが、評価そのものが根づいていない場合にはお互いにいい点数ばかりをつけて実際の評価活動にならない場合もあります。その場合、この相互評価の時間を短くして、活動を振り返って感じたことなどを言語化するため「日記を書く」などのタスクに変えても構いません。

4. 活動実施のポイント／注意点

- この課の活動は、通学途中、昼休み、放課後など教師の目が届かない時間帯や場所で行われます。学習者の母語が英語の場合には、日本人学生が英語でのおしゃべりを進めてしまい、学習者が活動をできない場合があります。そのため、録音すること、授業の活動として日本語でのおしゃべりが必要であることを会う約束をする段階で学習者から相手に伝えさせることが大切です。
- 「おしゃべり」は日本語がぺらぺら話せるかどうかではありません。おしゃべりで相手の日本語がすべて理解できる必要はありません。そのあたりを含めて、どのようにおしゃべりをしたのか、活動のあとで「ふりかえり」を十分行うことが大切です。そのため、ICレコーダーや携帯電話の音声録音機能などを使っておしゃべりの様子を録音させてください。
- この課の活動は、1課の「日本語で自己紹介する」、2課の「メールで連絡をする」、3課の「活動やイベントを見学する」での活動を通して知り合った人との活動を計画すると自然な流れになります。
- 日本語母語話者のおしゃべりの相手を見つけられない場合、教師自身が代わりにおしゃべりの相手になることは極力避けてください。また、年齢差が大きい初対面の相手もこの活動の目的には合いません。どうしても活動に日本人を入れることが難しい場合には、例1や例2の活動を学習者同士でさせるようデザインしてください。
- 教材の中では1人对1人のおしゃべりになっていますが、3人以上のグループでのおしゃべりの活動をデザインすることもできます。ただし、母語話者の人数が多い場合にはより学習者がおしゃべりの主導権を取るのが難しくなりますので、評価の際には配慮する必要があります。
- おしゃべりの様子を録音させ、授業で聞き直す活動をする場合には、学生に録音の許可を相手から取るのを忘れないようにさせてください。

* この課では、おしゃべりというインターアクションをすることで相手との心理的な距離が縮まり、言葉だけでなく、その後の関係性もよりカジュアルになっていくことを目指します。教師や年配の人との間で「友達関係」を築くのは不自然ですので、Part 3の「さあ、ほんばん！」での相手としてはふさわしいとは言えないからです。